

松下幸之助記念財団 研究助成

## 研究報告

【氏名】 今給黎佳菜

【所属】（助成決定時）お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

【研究題目】近代日本における陶磁器輸出と海外市場

## 【研究の目的】

本研究の目的は、近代日本における陶磁器輸出について、海外市場との関連からその実態を歴史的に解明することである。明治初期の万国博覧会への出品を契機として欧米諸国の間で称賛を得た日本製陶磁器は、近代を通して対外輸出を急拡大させた。この周辺の実態について近年注目が集まっているが、先行研究が経済史・美術史の両分野で個別的に蓄積されてきたこともあり、包括的な様相が明らかになっていない。そこで本研究では経済史・美術史両分野のアプローチおよび研究蓄積を取り入れることで、「海外需要の変遷と市場構造」というマクロの部分と「陶磁器製品の個々の特徴とその制作（製造）・販売に関わった主体」というミクロの部分の双方を明らかにする。その中でも特に今回の研究スケジュールにおいては、日本国内の陶磁器生産者側および貿易商側からの実態解明を深めることに重点を置く。

## 【研究の内容・方法】

国内の近代陶磁器産地および輸出地での調査において、今回対象としたものは、瀬戸焼・薩摩焼・有田焼である。瀬戸焼に関しては、瀬戸の素地に名古屋で絵付けがなされたこと、輸出商社森村組（現ノリタケ）の拠点が名古屋にあったことなどから、名古屋との地域的関係を考慮する必要がある。また、薩摩焼は、薩摩地方で製造された素地（半製品）が国内で流通し京都・大阪・東京・横浜などにおける絵付けを経て輸出されたという特殊な生産体制について明らかになっていない部分が多い。有田焼に関しては、柿右衛門窯に代表されるような近世以来のブランド戦略のもと生き続けた産品であるという点に注目すべきである。

以上をふまえ、今回調査をおこなった地域および調査内容は以下の通りである。

## ① 愛知（2010年10月、2011年1月）

- ・愛知県公文書館にて、万国博覧会出品書類および陶磁器業同業組合関係の史料を収集。
- ・瀬戸蔵ミュージアムにて、日本最初の陶磁器業業界新聞『陶器商報』（明治27年創刊）の全号を収集。これは当時の国内陶磁器業者の実態を示す貴重な史料である。
- ・名古屋陶磁器会館にて、戦後期まで継続する名古屋陶磁器輸出全体の様相について聞き取り調査。

## ② 鹿児島（2011年1月）

- ・指宿市薩摩伝承館にて、輸出薩摩コレクションの調査。学芸員への聞き取り調査。
- ・鹿児島県立図書館にて、関連史料・報告書・コレクション写真の収集。

## ③ 京都（2011年2月）

- ・清水三年坂美術館にて、輸出薩摩コレクション（京薩摩・大阪薩摩）の調査。館長への聞き取り調査。
- ・京都府立総合資料館にて、関連史料（藤岡幸二氏旧蔵資料ほか）の収集。

#### ④ 佐賀（2011年2月）

- ・佐野常民記念館にて、史料（佐野の手記ほか）および書簡目録の収集。佐野常民とは、明治政府による博覧会行政の第一人者であり、農商務省や美術協会に関わるなどして近代陶磁器輸出にも間接的に影響を与えた人物である。
- ・有田町にて、柿右衛門窯、有田ポーセリンパーク、有田町歴史民俗資料館などを訪問。聞き取り調査。

その他、

- ・「ART OF JAPANESE NARUSE SEISHI－海外から見た日本の技 成瀬誠志－」展（2010年10月・岐阜県陶磁資料館）
- ・「歴代沈壽官展」（2011年1月・日本橋三越本店）に赴いた。

#### 【結論・考察】

以上4地域における調査の結果、近代日本における陶磁器輸出の多様な様相が浮かび上がった。まず、瀬戸焼に関しては、同業組合が発達していた愛知県では万国博覧会への出品にも高い組織性が見られ、近代日本陶磁器業のリーディング地域という位置づけを再確認できた。次に、薩摩焼に関しては、今回は地域間取引を表す史料には至らなかったが（史料所在の見当はついているものの未公開）、現存する作品から窯元や絵付け業者を推測することが可能であった。これは報告者が昨年アメリカで実見した“SATSUMA”として現存する多数のコレクションともリンクするため、今後優先的に分析を深めていきたい。最後に有田焼に関しては、美術品としての価値保証が重要であり、海外からの需要に個別的に corres 応してきた性格が明らかになったが、それ以外の要素として廉価品輸出も重要であったのではないかという新たな疑問が生じた。

全体の課題としては、目的で掲げた生産者の実態を明らかにする史料はある程度収集できた反面、貿易商に関するものはあまり収集できなかったため、今後『陶器商報』を手掛かりにその点を補っていきたい。